この第三相において、二重盲検試験を製薬会社が実施することを義務づけている」、「二重盲検試験において、統計的に有意な差を期待するためには、試験薬の**生物医学**的な薬効以上に、より多くの被験者をも文字通りかき集めなければならない」など、なぜおかしいかの詳しい説明は省くが、実体としての「二重盲検試験」を知らず、よく理解していないことが見えてしまう。つまり、それぞれの用語の解説にはその質にバラツキがあり、内容がその正確性においてもいくらか危険なところもあるのである。

おそらく、私以外にも、「文化現象としての医療」のうち「医療」そのものに携わっている人にとっては、本書の内容に、ある種の距離感、「外野」からの批判といった感じを受けるかもしれない。その様なときには、各語に適宜ついている文献に直接あたってみると良いかもしれない。

ニューズレターは当初のB5判が突如A4判に変わったり、発行が遅れたりして、後で振り返ってある用語を探そうと思ってもなかなかでてこないようなこともあった。今回このような本にまとまり大変使いやすくなった。ニューズレターは一九九二年に通巻二〇号で発行が休止したようである。一九八〇年代後半は医療人類学という領域が、ディシプリンとして日本に定着していく時期であり、日本の若い研究者が勉強熱心に、世界の状況に鋭敏に反応した、その軌跡が本書に現われているともいえよう。

（津谷喜一郎）

〔メディカ出版・吹田市広芝一八―二四、電話　〇六―三八五―六九一一、B6判、三七六頁、定価二〇〇〇円〕

名古屋大学医学部整形外科同門会編集

『名倉重雄伝』

本書は、東京大学整形外科創始者田代義徳教授の門下であり、九一年の生涯を近代整形外科に捧げられた名倉重雄先生（一八九四―一九八五）の生涯を、門下の方々、特に愛弟子村地俊二博士が代表となってまとめられた二六六頁にわたる名倉重雄先生の伝記である。日本において整形外科学が始めて開講されたのは一九〇六年東京大学整形外科初代田代義徳教授が第一外科スクリバ教授の門より分れてドイツ留学の後作られたのである。名倉重雄先生はわが国でも有名な整骨接骨家の御出身である。名倉家は一四九五年の北條早雲の時代からの歴史を持ち、有名な千住名倉骨つぎ時代から石黒直悳氏の時代はどうしても西洋医学でなければならないとの言により、千住八代目の長子名倉重雄先生が始めて西洋医学の中で接骨を扱う整形外科を志され、府立一中、一高も経て大正八年東京大学医学部を卒業されるや躊躇なく整形外科を選び、田代教授の門下に入られたのであるが、本書にはその間の経緯がくわしく述べられており、ことに感動を呼ぶのは、田代義徳先生の創基された整形外科教室に入られたのは、名倉家が整骨家の家であったからではなく、初代田代先生の大人物の人柄を慕って入局されたというくだりである。

先生は学生中から帝劇や歌舞伎座で演劇や歌舞伎を愛好されたり、当時モダンだったゴルフをたしなまれたり、趣味の人であったこともふれられているが、大正九年御卒業と同時に副手、翌一〇年助手、同一五年講師になられている。大学院終了時の学位論文は、「先天性股関節脱臼における「アンテトルジオン（大腿頸部前捻）」の研究」で医学博士になっておられ、先天性股関節脱臼が先生の生涯にわたる研究テーマであった発端を窺うことができる。

先生は大正一四年一〇月五日の日本整形外科学会創立一八名の発起人の中にも入っておられることは歴史的にも興味がある。日本の整形外科学の創基者の初代の方々を、東大の田代、京大の松岡、九大の住田らとすると、名倉重雄先生は第二の世代に当り、田代義徳門下から、神中正一、高木憲次、名倉重雄、木島一郎、片山国幸、金子魁一らの諸先生が輩出していることも歴史に残る事実である。

本書には、名倉家の歴史、森鷗外との交流、先生の学生時代、医局在勤時代から、日本整形外科学会の創立、愛知医科大学への赴任、骨端炎、離断性骨端骨炎、先天性股関節脱臼の自然治癒、骨変形成因の研究、軟骨化骨説の着想、胎児の母体内運動によって起こる第二次的性格の先天奇形の成因説等多岐にわたるとともに、今日でもなおその先見の明に驚嘆を覚えるほどのものが本書に盛られている。

先生が名古屋大学御在任中は太平洋戦争中でもあり、爆撃被災にも御苦労なさったほか、中華民国南京政府汪兆銘（汪精衛）首席の主治医として名古屋帝国大学医学部において極秘裡にその治療・看護に当られたこと等も、また敗戦全焼に近い惨状の中から苦難の大学復興、昭和二二年の第一二回日本医学会における整形外科学会の主催も盛られ、また退官後は、東京厚生年金病院の創設と病院長時代の御苦労と業績、多くの門下生の育成、国内外の友人との交流、ことに先生はドイツ整形外科学会の名誉会員でもあられたが、ドイツ語にきわめて御堪能で、つとめて原著をドイツ語で発表され、ドイツで最も高名な日本の整形外科医であったこと、等々余すところなく先生の人と業績が語られ、この世を去られるまでの足跡が、先生に対する尊敬と愛情をもって書かれており、先生が終始 Voll. Orthopäd（全き整形外科医）としての生涯を送られた姿とその信念が十二分に伝って来る誠によき伝記である。

一九九〇年十一月名古屋大学医学部整形外科同門会（名声会）編集発行・代表者村地俊二（A4判、二六六頁）、非売品である。

（津山　直一）

千葉県立中央博物館編集

『リンネと博物学—自然誌科学の源流』

昨秋、一九九四年十月一日から十二月四日まで千葉県立中央博物館において特別展、リンネ展が開催されて入場者は八